

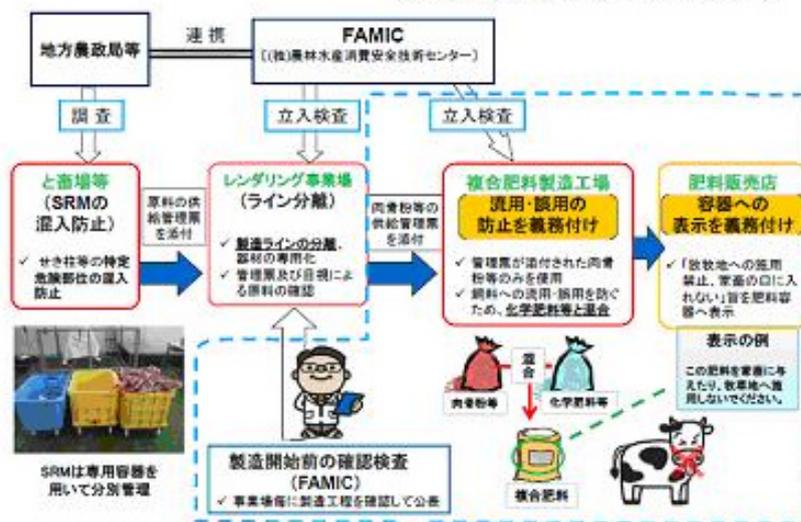
肉骨粉が肥料として再び解禁

食品安全委員会は、平成25年2月19日に農水省からの諮問を受け、牛由来の肉骨粉を2001年以来、肥料として利用する事を了承した。農水省は委員会の答申を受けて、省令の改正等の手続きを経て平成26年1月4日より、肥料利用の再開を認めた。

今回の肉骨粉使用規制解禁は、特定危険部位を含まない部分での肉骨粉、肉粉などが使用可能とされた。特定危険部位は今後も流通は出来ない。今まで通り地方農政局や独立行政法人農林水産消費安全技術センター（FAMIC）が連携し、と畜場等の現場確認、レンダリング事業場での製造開始前の確認検査（製造工程を確認後公表）を行ない、肉骨粉等の供給管理票を添付し供給する。また、飼料への転用や誤用を未然に防ぐため、肥料工場では化学肥料等の複合肥料原料として使用する事を義務付けし、FAMICの立ち入り検査を実施する（肥料製造場においては肉骨粉使用有無に関らず抜き打ちで立ち入り検査を実施している）。更に肥料販売においては放牧地への使用禁止、家畜の口に入れないよう注意喚起を明記した肥料容器へ表示を行い誤使用されないよう強化するとして対策を図る（下図）。

肉骨粉は窒素やリン酸質に富み、有機入り化成肥料の原料や配合肥料の原料としてとても利用価値が高い資材となっていた。また、肉骨粉で作られた果実や果菜類はとても甘みが深くなるとして生産者からも評判であった。肉骨粉の需要は高く国内では1999年に約2万トン消費されており、その内1.3万トンが国内品であったとされている。資源が少ない我が国において肉骨粉は貴重な優良リサイクル資源である。今後取り扱う商社・メーカー・流通業者がルールを遵法し有効に利用していくことが望まれる。

■ 牛肉骨粉等の肥料利用に当たって新たに導入する管理措置
 （図中の青破線で囲んだ部分を新たに導入）



出典：農林水産省



New 七草粥

1月7日は七草粥の日でしたね。春の七草、みなさんは言えますか？

答えは・・・「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ」

七草粥の習慣は、江戸時代に広まり、年初にあたり豊年を祈願し、「今年も家族みんなが元気に暮らせませすように」との願いが込められているのだそうです。七草を全て揃えるのはちょっと大変だな・・・という方でも大丈夫！ 普段身近にある青菜のお野菜「ほうれん草、小松菜、かぶや大根の葉、水菜、三つ葉等」で七草を代用してもOKです。

（次ページへ続く）

冬場の野菜 「ポイントは、ほうれん草とビタミンC」

ビタミンCは万能ビタミンと呼ばれ、ビタミンCそのものに、美肌効果や生活習慣病の予防効果がありますが、鉄と一緒に摂れば吸収率が高くなりますし、ビタミンAやビタミンEとあわせて摂ると抗酸化作用が高まります。ほうれん草にはこれらの栄養素が全て含まれていますのでとても効率の良い野菜です。そして、夏場より冬場のほうれん草の方が、ビタミンCが約3倍も多く含まれています。風邪の予防にも積極的に摂りたい野菜です。

七草粥をリゾート風アレンジ

【材 料】2～3人分程度

コメ：1合 トマトのホール缶（カットされているものがオススメ）：一缶（260g）

水：750ml：* トマトの水煮と水の代わりに同量のトマトジュースでもOK

七草：細かく刻んでおく（野菜の量はお好みで）

コンソメ：固形タイプ1個 塩：小さじ1（適度好みで）

【作り方】

1. 鍋にトマトの水煮と水、磨いだコメを入れ、30分以上浸水させる。
（時間がない場合は浸水なしでもOK。土鍋だと、よりおいしく作れます）
2. 塩を入れ、沸騰するまで中火で熱し、その後コンソメを入れ弱火で30～40分、時々かき混ぜながら、蓋をして加熱する。
3. とろとろになったら、七草を入れ、火を止め、蓋をして10分ほど蒸らす。



年頭に当たって

当社取締役社長 三宅誠二

明けましておめでとうございます

一部の地域を除いて、全国的に比較的穏やかな気候のもとでのお正月となりました。安部政権が発足して1年強、アベノミクスの効果か、個々にはいろいろあるものの、景気の方も全般的には上昇に転じてきたとの実感が強まってまいりました。また農業に関しては、昨年末に減反政策見直しまで踏み込んだ新農政が明らかになる一方、TPPについてはその交渉が越年となりいよいよ正念場を迎えつつあります。その結果がどうなるか予断を許しませんが、農業そのもの或はその周辺産業では、市場原理、経済合理性といったものを一段と強く意識せざるを得ない状況になることは恐らくまちがいないだろうと思われれます。

例えば、主食である米の世界では、25年産米の価格下落に伴い、少なからぬ米流通業者が厳しい状況に陥る一方、様々なニーズを持つ多くの実需者が自身のニーズをより安価で満たすために、産地と直接或は産地に近いところで契約をする傾向が益々増えてきております。やはり実需を持つ方々がどのような意向かをよく把握しながら、その方向性に沿った農業生産を考えることが従来にもまして農業現場で重要になってきているといわざるを得ません。私どもも、肥料等の農業資材の供給を通じ、また関係メーカーとも歩調を合せて変化が進む実需に合わせた新たな資材の開発も行うことで聊かなりとも日本農業の発展に貢献できればと考えております。

平成26年が当紙をお読みいただいている全ての方々にとり、すばらしい年となりますよう、心よりお祈り申し上げまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

明けましておめでとうございます。長いお休みを皆様はいかがお過ごしでしたか。日頃、仕事に追われている方々も、しばし頭をフラットにする時間が持てたのではないかと思います。今年も情報アンテナをピンと張って、旬な情報をお届けして参りたいと思います。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

編集事務局：南部、助川